青春を銃後の守りに徹して

須磨　ミサヲ　（習志野・65歳）

私は大正十三年に福島県会津北部の一山村に生れ二才にして父を亡くし五人兄妹の末っ子として優しい祖母や家族と共に戦前は貧しい乍らも平和に暮しておりました。

昭和十二年夏、突然盧江橋に端を発した中国との事変は私が十二才の七月七日でした。

それから次第に戦局も拡大し、日支事変と名も改まり中国全土に及び、向う処敵なしと豪語し乍ら、陥落祝いの提灯行列や旗行列等祝賀行事で全国が湧返ったものです。

併し中国も長期戦の構えで我軍の思う様には攻略出来ずに居るうちに、昭和十六年十二月八日アメリカ真珠湾に奇襲をかけて一挙に戦域が拡大され、太平洋戦争となり負け知らずの様相でしたが何分にも小さな島国です、長期に渡れば物資の不足は必然です。そのうちに戦争も第二次世界大戦となり欧米の諸国が介入し、国交を断たれては、どうにもなりません。私も三人の兄が居りましたが、長兄は三人の幼子を残して病死し、次兄は戦地へ、三人目の兄は、当時国策だった満州開拓の為に義勇軍として渡満。姉は既に嫁いでおりましたので、幼子を抱えた兄嫁と母を助けて十六才の私には重荷でしたが、進学を断念して銃後を守る気負いだけは一人前でした。

併し戦争が長期になると物資不足が深刻となり国民の生活もおびやかされてきました。

いろいろほしい娘ざかりに「欲しがりません勝つまでは」とがまんしました。「脂粉追放」等と言う言葉も生れ、紅白粉は国賊のような時代に青春を過しました。

それでも私達は農家でしたし、避地の利で敵の爆音も近くで聞く事はありませんでした。だが南京爆撃の決め手となったのは、山寺の灯りだったときかされて、灯火管制だけは厳しく取り締まられました。

食料は供出させられましたが、屑米や雑穀があり不自由はしませんでした。その点しあわせだったと思います。衣類や布団の皮までも作業衣にかわり、どれがもとの布地か判らない程、当て布をして着たものです。果ては衣料切符なるものも発行され、点数制にて縫糸さえ買えぬようになりました。でも人間の知恵もどん底にくればひらめくもので、今迄見た事もなかった綿等畑につくって糸をとり布を織って作業衣にしました。蚕を飼って絹糸を織り、緬羊を飼って毛を刈取り毛織物や編物もしました。併し染料はありません。自然のもの、くるみの青皮は黄土色。桐の木の消炭で灰色等と工夫して縞柄をつくったものです。現在の草木染のように優雅な色を出す心の余裕はありませんでした。

次第に逼迫した情勢の中で後退を始めた戦況も、国民はしらされぬまま

に、勝利を信じてひたすらに耐えていたのです。

本土爆撃もあり得る状況となり都会からの疎開者が地元の住民より多くなる様な実情で、温泉地だった我が村にも東京の小学生が村の小学生より多い程、旅館や寺院に集団疎開して来て学校も地元の子供達と交替で教室を使っていたようです。

仕事の休みの時にお芋等持って行って虱退治を手伝って自分まで貰い受けて着物を煮沸した事もありました。

私ももう一人前の女子青年でした。戦地の家族に当てた手紙の代筆等は毎夜のように致しました。文盲の老母達には喜ばれたものです。

竹槍や薙刀の軍事教練をうけたのもこの頃からです。声がたつからと閲兵分列行進の号令かけもしました。バケツでリレー消火の訓練もしました。結果的には何の役にも立ちませんでした。

また思い出に残る事は、松の古い根っ子掘りです。飛行機を飛ばすガソリンも欠乏し、松の根から油を搾り出して使うと言うのです。松根掘りを村に割当てられて来ると共同で山に入ります。古いものでないと油が出ないと言うので探すのも大変です。男手のない我が家では何時も私が出ていましたが、村にも屈強な男はなく、年寄り相手で女でも若い私等頼りにされたものです。終戦の前年位の事です。核兵器を持つ敵国に向って松の油をとって飛行機をとばそうとする、今にして思えば笑い話にもなりません。

現在程情報網もなく、実情は伏せられたまま。ひたすらに勝つと信じていたのです。

そして元気に出征して行った人々が遺骨となって還る数がふえました。遺族の胸の中もよめずに英雄あつかいして、一体何の為に身を犠牲にしたのか、今でこそ怒りの言葉も出ますが、言論の自由さえなかった当時はそれでも国の為と諦らめて居たのです。

東京が焼けの原になったときいても実情を見て居ない地方ではまけるとは思えなかった。

神国日本を信じたが、遂に神風は吹かなかった。教育の持つ意義の重大さがしみじみ身に感じられました。

そんな中で迎えた終戦の混乱。物価は上がる一方、それでも金では用をなさず、すべて物々交換優先の世の中になってしまった。

当時私の故里の近くに軍隊の被服廠の地下倉庫がひそかに造られてあったのですが終戦のドサクサにまぎれて持ち出した綿糸を闇流しして財を築いた人もあったとか。既に時効でしょうけど。私も二十才でした十二才から二十才まで楽しかるべき青春をひたすら国の為と信じて食糧増産に励んだのです。

戦争が終わっても一気に平和にはなりません。それからの混乱期こそ生き抜く戦争でした。疎開された方々が竹の子生活をはじめられたのもその頃です。生き抜く為に持物の一つ一つ着る物の一枚一枚食糧と交換し乍らの生活、それを竹の子生活と言ったのです。

私は何も買えない時でしたのでその竹の皮を嫁入支度にしました。ある日小さな鏡台を背負って食糧を求めて来たおばさんがありました。母より一廻り位年上の人の様に覚えています。親戚を頼って疎開して来たが息子は戦死、嫁は都会育ちで農村に来ては何も出来ず、食べ盛りの孫の為に食料がほしいと言うのです。

鏡台等とても手に入らない時代です。でも嫁入りに持たすには古物だと言う母に私はこれでいいからと言って芋と餅や麦を背負わせて帰らせた事を覚えています。

又私の家は代々紙漉きを冬仕事としてやっておりました。紙を作るのには楮の皮に曹達灰を入れて煮るのですがそれが手に入らなくなっていました。そんな時にある人の紹介で東京の製紙会社につとめている人を知り、お米と引替えに横流しをして貰った事がありました。処が東京まで私が運ぶ事になり、大きなリュックを背負って、つかまりはしないかとビクビクし乍ら汽車に乗りました。会津から赤羽まで始めての旅で心臓がちぢむ思いでした。でも幸運にも兵隊さんと向い合って席がとれホッとして母が作ってくれた塩漬しそを巻いた麦飯のおにぎりを出しました。兵隊さんもおにぎりを出しました。私のものをおいしそうに見えたらしく声をかけて来ました。また私は兵隊さんのおにぎりがお赤飯のような色をしていたのでおいしそうだと思い交換しました。兵隊さんはおいしそうにたべていましたが、私の方はとてもまずいのです。それもそのはず色はついていても、それはこうりゃんと言うきびの御飯だったのです。持帰って家族に試食させました。

昭和二十一年五月八日、三月に戦地から帰った夫と結婚しました。

先方の家族は7年程前にある事情で田畑を人手に預け上京し、戦争に遭って焼出され、やむなく田舎に帰り田畑を返して貰って、種籾から買求めて漸く百姓を始めようとした処に長男が復員して来たので先ず嫁を貰わねばと言った処だったのです。

とに角秋の収穫までは何もないのです。家族揃ってよそに日雇に行っては、米味噌等を貰って生活しました。肥料は配給で思う程入れられません。対策として土壌の改良を手がけました。並の苦労ではありませんでしたが二、三年で村一番の収穫を上げたのです。二十二年には長女も生れたのですが栄養不足と過労で陣痛微弱の為に苦労しました。

依然物資の不足は続きましたが次第に農家としても成立ち、子供も一男二女と恵まれたのですが、将来の農業経営が今のままでは必ず行詰りが来ると、多角経営をして増収をはかろうとして始めた育牛と養鶏に失敗して倒産し三十九年に又故郷を後にしたのです。

何の特技もない中年者がポッと都会に出て来て、楽なくらし等もともと予期しては居りませんでしたが予想に勝る苦労でした。

今では三人の子供もそれぞれに世帯をもち孫も生れて七人の孫持ちになりました。

夫は3年前に他界致しましたが、弱かった夫の分まで私は健康に恵まれ、「地域に貢献」をモットーに、息子夫婦と同居し支えられ乍ら日々安穏に過しているしあわせ者です。

終戦より四十余年、此の平和を築く為に努力して来た、又戦争の犠牲に耐えて生抜いてきた今の高齢者、やっと安堵の胸を撫でて居られる方も多いと思いますが、あの戦争の悲惨さが、昔の事として忘れさられる事がない様に祈るばかりです。何でも欲しいものは手に入る豊満な社会にドップリ浸って、耐える事をきらう子供達。物は豊富でも、心の貧しい世相。人の生命等何とも思わぬ暗いニュースの多いこの頃、目にも見えぬ、どこかが狂っていはしないか。折角築いた平和を権力によってこわす事のないように、やっと築いた民主主義国家です。庶民の声も政治に届くそんな社会にしてほしいものです。